

# 共感性と感情

## —Jungのタイプ論による検討—

佐 藤 淳 一\*

(平成21年10月2日受付；平成21年11月6日受理)

### 要 旨

本論文の目的は、共感性を共有経験と共有不全経験から位置付けたいうえで、Jungのタイプ論における感情との関連を検討することにある。350名の大学生及び大学院生男女（平均年齢20.9歳）が、共有経験尺度改訂版とJungの心理学的タイプ測定尺度に回答した。その結果、外向感情タイプは共有経験を高く示したのに対し、共有不全経験を低く示した。一方、内向感情タイプは共有経験を高く示したものの、共有不全経験をそれほど低く示さなかった。こうした結果から、感情タイプであれば共感性が高いという仮説は必ずしも支持されたとはいえず、外向感情タイプにおける共感とは、むしろ同情に近いことが示唆された。

### KEY WORDS

共感empathy 同情sympathy 感情feeling 心理学的タイプpsychological type

### 問 題

#### 心理臨床における共感性

われわれは人とのかかわる際に、相手の考えや気持ちを察したりくみ取ったりして、まるで自分のことのように考えたり感じたりすることがある。こうした現象は一般に「共感」と呼ばれ、広く日常生活にも浸透している。広辞苑（第六版）（2008）によると、共感とは「他人の体験する感情や心的状態、あるいは人の主張などを、自分も全く同じように感じたり理解したりすること。同感」とされている。自らと異なる考えや気持ちを持つ「他者」と対話したりコミュニケーションするためには、こうした共感性は欠かせない要素であると思われる。

これまで発達心理学、社会心理学、パーソナリティ心理学などの領域において、共感に関する研究はさまざまな立場やアプローチから行われてきた。一方、心理臨床においても、セラピストの共感とは、クライアントとの関係を支え、また心理面接の進展に関わるものとして、学派や理論の違いを超えて重視されてきた。というのも、セラピストがどのような立場であれ、クライアントとの信頼関係がまず心理面接の土台となるからである。

共感研究を行うに当たって、まず共感をどのように定義するのかという問題がある。これまで共感概念はさまざまな立場から多義的に扱われてきた経緯がある。そこではじめに、心理臨床における共感概念について簡単に整理してみたい。

共感（感情移入）Einfühlungという言葉をはじめて用いたのは美学者Lipps（1909）である<sup>1</sup>。もともと共感（感情移入）は、人が芸術作品に心を動かされる心理過程を説明するために「対象の中に入って感じる」という意味として用いられたのがはじまりで、それが対人関係における心理過程を説明するために用いられるようになっていった。主体が客体の感情状態を知覚し、客体に注意を向けながら自らの体験に基づくイメージを呼び起こすという点で、主体の体験でありながら客体の感情の体験としても考えられた。つまり共感の出発点には、主体が客体の感情を想像して共有しようとする観点があったといえる。

心理臨床において、共感からまず連想されるのは、クライアント中心療法を創始したC. Rogersの概念であろう。Rogersはクライアントの治療的变化に必要なかつ十分な条件として6つの条件を挙げたが、そのうちセラピストの態度として3つの条件（「積極的肯定的関心」、「共感的理解」、「自己一致／純粋性」）がとくに有名である。カウンセリングの研修の機会によく耳にする言葉であるが、その意味を十分に吟味しておく必要があると思われる。Rogersは共感的理解について次のように説明している。

「クライアントの私的な世界をそれが自分自身の世界であるかのように感じ取り、しかも『あたかも・・・』のごとくという性質（“as if” quality）をけっして失わない—これが共感なのであって、これこそセラピーの本質的なものであると思われる」（Rogers, 1957, 邦訳p274）。

---

\*臨床・健康教育学系

この説明は印象的でわかりやすいため広く浸透しているが、ときにクライアントの訴えを全面的に受容したり、クライアントの意見に賛同することがセラピストの共感と理解されてしまうことがある。はたして、「あたかも…のごとく」という性質を失わないとは、一体どういったことなのだろうか。Rogersは引き続いて、次のように説明している。

「クライアントの怒り、恐れ、あるいは混乱を、あたかも自分自身のものであるかのように感じ、しかもその中に自分自身の怒り、恐れ、混乱を巻きこませていないということが、私たちが述べようとしている条件なのである。クライアントの世界がこのようにセラピストにはっきりと映り、セラピストがクライアントの世界のなかを自由に歩きまわるとき、セラピストは、クライアントにはっきりしているものを自分が理解していることを伝えることばかりでなく、クライアントがほとんど気づいていない自分の経験の意味を言葉にして述べることもできるのである」(Rogers, 1957, 邦訳p274)。

つまりセラピストがクライアントの主観的世界を自らの経験のように感じつつ、しかも自らの経験に巻き込まれないことが「あたかもという…のごとく」という性質を失わないことなのである。セラピストがこうした経験を保つうちに、自らの内的世界だけでなく、クライアントの内的世界も自由に探索できるようになり、さらにはクライアントの感じている経験だけでなく、感じていない経験さえも共感できるようになる。こうした共感をRogersは「鋭い共感」と呼んでいる。したがって、クライアントへのいわば「鈍い共感」だけでなく、「鋭い共感」も行うことが共感的理解ということが出来る。

精神分析においてS. Freudは、分析家の態度として転移の中立性を保ち、被分析者には先入観を持たず、自由に漂う注意を払いながら連想を聞くことが重要であるとした。共感についてそれほど述べていないが、成人の他者理解に大きな役割を果たすものと捉えており、その基礎には主体の客体への同一化や模倣の機制があると想定している(Freud, 1921)。ただしここでいう同一化とは、主体性をなくして客体化してしまう防衛的な意味での無意識的過程とは区別される。

その後、自己心理学のKohut (1959) は、共感を治療的にも理論的にも重要であると強調した。セラピストの共感を「代理の内省」、「他者の内的生活の中に自分を入れ考え感じる能力」、「他者の内的世界を客観的な観察者として保ちながら同時に体験する試み」などとして定義している。つまり、観察者としての主体性を保ちながら、可能な限り客体のなかに身を入れて、クライアントの代わりに考えたり感じることにいえる。Rogersの共感と似通っている面もあるが、Kohutの場合、自己対象を求めるクライアントの自己対象転移という文脈がその背景にある。

他方、分析心理学においてC. G. Jungは、セラピストの存在とは、クライアントの心理療法の同伴者であり、お互い自己実現の過程に参与するものであると述べている。共感(感情移入)については、主体が客体の内容を取り込むという点から一種の同化の過程とみなしており、Freudと同じくその基礎には主体の客体に対する同一化の機制を想定している(Jung, 1921)。また共感の過程には一種投影の機制が働いているとしているが、あくまでも主体と客体の分離をはたした上での能動的な投影のことであり、病理的かつ一般的な投影にみられるような防衛的で受動的な投影とは区別される。

以上の考えは、いずれも主体と客体の分離という前提のもとに、主体が客体の内的世界を想像して感じ取ろうとする点で共通しているといえる。また、共感を捉えるうえで主体に生じる情緒を重視する立場ということもできるので、共感研究の「情緒的アプローチ」と呼ばれることもある<sup>2</sup>。

## 共感と同情

共感と近接する概念には、同一化、役割取得、情動伝染などいくつかあるが、本稿では「同情sympathy」を取り上げてみたい<sup>3</sup>。先に説明したように、共感が導入される以前は、日本では同情、英語圏ではsympathyという言葉が用いられていた。用語の持つ意味は時代とともに変わるが、共感が使われる前には、同情にも他者の気持ちや考えをわかち持つという意味が含まれていた。現在広辞苑(第六版)によると、同情とは、「他人の感情、特に苦悩・不幸などをその身になってともに感じることを意味する。このように、客体の悲しみや苦しみといった感情状態を指すことが多い。また同情においては、する側とされる側に優劣や上下の関係が生じていることがある。つまり、同情をする側はされる側より上の位置にあるため、自己の安定が脅かされることはないのだが、同情をされる側にとっては見下されたように感じることもさえる<sup>4</sup>。

心理学領域における共感も、当初は同情と似たものと扱われていたが、のちに否定的な感情体験だけでなく、肯定的な感情体験の意義や主体の能動的な視点が強調されるようになり、次第に同情とは区別されるようになっていった。おおざっぱにまとめれば、同情は自己志向性を持った他者との共有経験であるのに対し、共感とは他者志向性をもった他者との共有経験といえよう。

一方で、現実の他者理解の場面を考えてみると、つねに他者に共感できるとは限らない。むしろ共有できなかった経験のほうが多いかもしれない。他者の気持ちを共有できなかった経験は、相手と切り離された分離の感覚やわがらうとしてわからなかった不全感を生むが、一方で自分と他者は異なる存在であるという個別性の認識をもたらす。角田（1994, 1998）によると、成熟した共感を示すものは、他者の気持ちを共有できるだけでなく、共有できなかったことも同じように感じ取れるという。つまり、他者の気持ちのわかった面とわからない面の両方を意識化できるといえる。一方、同情を示すものは、他者の気持ちを共有しやすいのだが、共有できなかったことを感じ取りにくいという。したがって、他者の気持ちのわからない面を意識化しにくいといえるし、自分と他者は異なる存在であるという個別性の認識を持ちにくいものとも考えられる。

こうした点から、角田（1994, 1998）は他者理解における共感を共有経験と共有不全経験から規定した。共有経験とは、「能動的または想像的に他者の立場に自分を置くことで、自分とは異なる他者の感情を体験すること」、共有不全経験とは、「他者の感情を感じ取れず、自己と他者の間に個別性の認識を生むこと」を意味する。他者理解に至る成熟した共感とは、他者の気持ちがわかる共有経験だけでなく、気持ちのわからない不全経験を伴うことで成立するとされる。一方で、他者理解に至らない自己志向的な同情とは、他者の気持ちが分かる共有経験のみに傾いており、他者の気持ちがわからない共有不全経験を伴っていない状態を指している。

### Jungのタイプ論と感情機能

本研究ではJungのタイプ論を取りあげて共感性との関連を検討してみたい<sup>5</sup>。C. G. Jungは、自らの立場を分析心理学と呼び、言語連想法を研究上の出発点として、コンプレックス、元型、集合的無意識など重要な概念を提起し、その後の深層心理学の領域に大きな影響を与えた。なかでも「心理学的タイプPsychologische Typen（タイプ論と略）」（Jung, 1921）は、自らの臨床経験に基づいて考え出された人格理論であり、Jungの著作のなかでは初期の代表作にあたる。また心理学一般においても、代表的なパーソナリティの類型論としてよく知られており、現在でも向性の概念については、理論的立場の違いに関わらず、多くの研究者に取り入れられている。「外向的」や「内向的」という言葉は、学術領域を越えて、われわれの日常にも広く定着している。

ある個人の心理学的タイプは、一般態度と心的機能の2つの側面からなる。一般態度は「外向－内向」、心的機能は「思考－感情」および「感覚－直観」の次元から構成されている。ここで「外向－内向」と表記したのは、外向と内向がお互いに相反するという対概念が想定されているためである。そして、一般態度と心的機能の組み合わせにより、外向思考タイプ、内向思考タイプ、外向感情タイプ、内向感情タイプ、外向感覚タイプ、内向感覚タイプ、外向直観タイプ、内向直観タイプの8タイプが考えられている。

これまで国外では個人の心理学的タイプと共感性との関連が検討されている。その結果、大まかにいえば、主体の感情機能や感情タイプと共感性との間に正の関連が報告されている<sup>6</sup>。すなわち、感情機能の高いものや感情機能の優勢な感情タイプであれば共感性も高いことが示唆されている。そもそも他者の感情を感じ取るという点で、すでに感情機能は共感性と結びついていると考えることもできる。

ここで感情の定義について見直してみよう<sup>7</sup>。感情とは「自我と与えられた内容との間に生じる活動であり、しかもその内容に対して受け容れるか拒むか（「快」か「不快」か）という意味で、一定の価値を付与する活動」（Jung, 1921, 邦訳p462）とされる。すなわち、意識内容を価値によって整理し判断する機能のことを意味する。この感情機能と対となるのが思考機能であり、意識内容を概念によって整理し判断する機能のことを意味する。このような意味を持つ感情を共感の観点からみると、主体は感情機能によって客体のもつ価値観を整理し判断することで共有経験を形成しているといえる。先の知見に従えば、意識に分化された感情機能が他者への共感性の高さをもたらしているものとも考えることもできる。

しかしながら先の研究においては、共感概念こそ多義的に扱われているにせよ、相手を共感できるか否かといったいわば共有経験の側面しか注目していない点は共通しており、共有不全経験の側面が扱われていない。つまり、感情機能の高いものや感情タイプは、たしかに他者の経験を共有しやすいけれども、それにはたして自他の個別性の認識が伴っているかどうか明らかではない。したがって、感情機能の高さや感情タイプであることが、はたして成熟した共感につながるのか、あるいは自己志向的な同情につながるのかはわからないのである。逆にいえば、成熟した共感において感情がどのようなあり方を示すのか検討する余地があるだろう。

そこで本研究では、共感を共有経験と共有不全経験から位置づけたうえで、とくに感情に焦点を当ててJungのタイプ論との関連を検討することを目的とする。もし従来通り、感情機能の高さや感情タイプが共感性の高さに関連しているのであれば、感情機能と共有経験ならびに共有不全経験とは正の関連を示し、また感情タイプはその他のタイプよりも共有経験ならびに共有不全経験を高く示すと予想される。

## 方 法

共感性の測定については、角田（1994）の作成した共感経験尺度改訂版（Empathic Experience Scale Revised：以下EESRとする）20項目を用いた。EESRは、「共有経験」（Scale of Sharing Experience；以下、SSEと略）と「共有不全経験」（Scale of Insufficient Sharing Experience；以下、SISEと略）の下位尺度からなる。EESRは、共感の統合的アプローチ<sup>8</sup>に基づいており、次の5つの観点が考慮され作成されている。1）情動伝染など受動的で他者理解に至らない内容を含まない。2）客体と同様の感情体験がなされ（情緒的アプローチに基づく）、一般的な態度のみを内容としない。3）客体の立場に立つ視点を含む（認知的アプローチに基づく）。4）共感的な内容は社会的に望ましいと考えられるため、偽りの反応が生じる可能性がある。5）感情の種類（喜び、悲しみ等）に幅を持たせる。回答形式は7件法であり、得点化は“まったくあてはまらない”から“とても当てはまる”まで1点から7点を与えた。

Jungの心理学的タイプの測定については、Jung's Psychological Types Scale（以下、JPTSと略；佐藤，2005）27項目対を用いた。JPTSは、「外向－内向」（Extraversion-Introversion：以下、E-Iと略）、「思考－感情」（Thinking-Feeling；以下、T-Fと略）、「感覚－直観」（Sensation-Intuition；以下、S-Nと略）の3つの下位尺度からなる。回答形式は、対極性の概念に基づいており、項目対（a，b）について、「aにまったく当てはまる」から「bにまったく当てはまる」までの双極型の7件法である。得点化は、EからI，TからF，SからNの方向に7点から1点を与えた。たとえば「E-I」得点は、高くなるほど外向的であり、低くなるほど内向的であることを示す。EESRとJPTSを合わせて調査質問紙とした。

調査協力者は、大学生および大学院生男女350名（男性182名，女性168名，平均年齢20.9歳）であった。調査実施は、主として授業時間を利用して集団法で行った。実施に先立ち、調査の目的や倫理的配慮について説明し、調査協力から自由に離脱できる旨を伝えている。調査時期は、2005年6月から2006年9月であった。

## 結 果

表1にJPTSとEESRの平均値，標準偏差， $\alpha$ 係数を示した。

表1 EESRとJPTSの平均値，標準偏差， $\alpha$ 係数

尺度		M	SD	$\alpha$ 係数
EESR	SSE	35.39	11.88	0.88
	SISE	33.35	12.58	0.91
JPTS	E-I	31.14	9.87	0.82
	T-F	27.61	8.49	0.78
	S-N	34.86	8.57	0.77

N=350

表2にJPTSとEESRの下位尺度間の相関係数を示した。男女ともに，JPTSの「T-F」とEESRの「SISE」との間に弱い正の相関がみられたのに対し，JPTSの「E-I」とEESRの「SISE」ならびにJPTSの「T-F」とEESRの「SIE」との間に弱い負の相関がみられた。また，女性においては，JPTSの「E-I」とEESRの「SIE」との間に弱い正の相関がみられた。感情機能についていえば，男女ともに共有経験得点との間には正の関連を示したのに対し，共有不全経験得点との間には負の関連を示した。

表2 JPTSとEESRの下位尺度間相関

EESR		JPTS		
		E-I	T-F	S-N
SIE	男性	.16**	-.22**	-.19**
	女性	.23***	-.28***	.11
SISE	男性	-.25**	.20**	.14**
	女性	-.21***	.26***	.06

\*\*\* $p < .001$ ，\*\* $p < .01$ ，\* $p < .05$



心理学的タイプの判別は Jung の概念に基づき、JPTS の下位尺度得点における理論上の中央値を基準に行った<sup>9</sup>。結果、判別不可のものを除き、外向思考タイプ (Extraverted Thinking Type; E T と略) 9 名、外向感情タイプ (Extraverted Feeling Type; E F と略) 60 名、外向感覚タイプ (Extraverted Sensation Type; E S と略) 12 名、外向直観タイプ (Extraverted Intuition Type; E N と略) 16 名、内向思考タイプ (Introverted Thinking Type; I T と略) 14 名、内向感情タイプ (Introverted Feeling Type; I F と略) 131 名、内向感覚タイプ (Introverted Sensation Type; I S と略) 39 名、内向直観タイプ (Introverted Intuition Type; I F と略) 42 名であった。

心理学的タイプを要因とする EESR の下位尺度得点の分散分析を行った (表 3 参照)。その結果、共有経験得点、共有不全経験とともに、心理学的タイプの主効果が認められた ( $F(7,315)=5.04$ ,  $F(7,315)=5.00$ , ともに  $p<.01$ )。Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ、共有経験得点については、外向感情タイプおよび内向感情タイプが内向感覚および内向直観タイプに比べて有意に高かった。また、一方、共有不全経験得点については、外向感覚タイプ、内向思考タイプ、内向感情タイプ、内向感覚タイプ、内向直観タイプが外向感情タイプに比べて有意に高かった。

心理学的タイプ別にいえば、外向感情タイプは共有経験を高く示したが、共有不全経験を低く示した。内向感情タイプは同じく共有経験と高く示したが、共有不全経験はそれほど低く示されなかった。内向感覚タイプと内向直観タイプは、共有経験を低く示したのに対し、共有不全経験を高く示した。

表 3 心理学的タイプによる共有経験および共有不全経験得点の分散分析結果

EESR		JPTS								分散分析	
		ET	EF	ES	EN	IT	IF	IS	IN	F値	下位検定
SSE	M	37.11	37.88	34.42	34.63	31.71	36.67	31.90	31.90	5.04**	EF, IF>IS, IN
	SD	6.43	6.55	9.85	7.81	8.98	6.58	8.40	6.89		
SISE	M	33.67	28.95	36.58	33.63	38.71	33.01	35.97	35.43	5.00**	ES, IT, IF, IS, IN>EF
	SD	8.23	8.72	7.13	9.45	5.69	8.22	7.74	4.94		

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

N=323 心理学的タイプ判別不可を除く

## 考 察

本研究は、共感を共有経験と共有不全経験から位置づけ、とくに感情に焦点を当てて Jung のタイプ論との関連を検討した。第 1 の結果として、外向感情タイプと内向感情タイプは他の心理学的タイプよりも共有経験を高く示した。つまり感情タイプは、他者理解の際に相手の気持ちを感じ取りやすいことが明らかになった。第 2 の結果として、外向感情タイプは他の心理学的タイプに比べて共有不全経験得点を低く示したことから、他者理解の際に相手の気持ちを感じ取れないことが少ないことが明らかになった。

すなわち外向感情タイプは、共有経験を持ちやすいが共有不全経験をもちにくいことから、成熟した共感というより同情を示しやすい傾向があるといえる。こうした結果から、感情タイプであれば共感性が高いという仮説は必ずしも支持されなかった。というのも、外向感情タイプにおいて、共有経験を高く示した点については仮説を部分的に支持したことになるが、共有不全経験を低く示した点については仮説とは逆の結果となったからである。

Jung (1921) によれば、外向感情タイプは客体の持つ価値に方向づけられている。たとえば外向感情タイプが「美しい」とか「良い」と感じる場合、主観的な感情から判断をしているのではなく、その場にふさわしい、客体の価値に合った判断をしている。こうした外界に適応的な判断機能によって、一般に外向感情タイプは、適切な人間関係を結び、容易く外界に適応する。「この感情なくしてたとえば気持ちの良いなごやかな交際など考えられない」(Jung, 1921) し、環境に対する「潤滑油」ともいえる調整役ぶりを発揮し (von Franz, 1972)、彼らのペルソナには非の打ちどころはない (Meier, 1972)。しかしながら一方で、客体の影響が大きくなると、主体が客体に同化してしまい、そのため主体の感情が多少なりとも消えうせてしまう。共感においても、「外向が感情的であれば、主体は客体の中に没入して感じる」(Jung, 1921) ように、主体は客体に同一化して他者の経験を感じ取るので、ある意味で他者の経験を共有しやすくなるものの、他方で、客体とは異なる主体の経験を認識しづらくなり、他者の経験を感じ取れないという不全感を抱きにくくなると考えられる。もしそうであれば、外向感情タイプの共有不全の低さは、たんに自己満足のなものというより、客体価値への方向付けが強く反映された結果であると考えられる。すなわち、客体価値に方向づけられて他者志向的に共有経験を高めていくために、自らの個別性自体を認識しづらくなり、

それが結果的に共有不全の低さにつながったのではないかと考えられる。

内向感情タイプは、外向感情タイプと同じく共有経験を高く示したが、共有不全経験をそれほど低く示さなかった。仮説を積極的に支持しているとはいえないが、外向感情タイプのように、仮説と逆の結果になるわけでもなかった。この理由として、内向感情タイプにおける内向態度が自他の個別性の認識を促したと考えることもできる。つまり、一方で感情機能によって他者の気持ちを感じつつ、他方で内向態度によって自他の個別性を認識しているのではないと思われる。内向感情タイプは「止水は深し」と表現されるように (Jung, 1921; Meier, 1972, von Franz, 1972), 外界には示さない深い感情を持っている。「たいてい冷ややかで控え目に見えるため、表面的に判断すると彼にはいかなる感情もないように見える。しかしそれは根本的に間違っている、というのは彼の感情は外に向かうのではなく、内に向かうからである」(Jung, 1921, 邦訳p419)。他者理解の共感において高い共有経験とともに共有不全経験もある程度示したことを考えると、内向感情タイプの内に向かう感情には、たんなる自己満足に陥らない、ある意味豊かな性質が備わっていると考えることもできる。

今回、外向感情タイプと内向感情タイプは、共有経験には違いがみられず、共有不全経験に違いがみられた。共感性の観点からいえば、共感と同情を区別する意義が改めて示されたことになる。従来の知見を振り返ってみると、共感における共感的側面にのみ注目していたため、共感と同情が区別されないまま、感情機能と共感性との関連が結論づけられていたのではないだろうか。

第3の結果として、内向感覚タイプと内向直観タイプは、共有経験を低く示したのに対し、共有不全経験を高く示した。つまり、他者理解の際に他者の気持ちを感じ取りにくく、不全感を抱きやすい傾向があるといえる。両者はともに、内向感覚や内向直観といった主観的な知覚に方向づけられており、そうした意味で内向非合理タイプとも呼ばれる。「彼らの目は豊かな習慣的な出来事に釘づけになっている。内で生じることがあまりに魅力的で、尽きることのない刺激を送ってくるため、それについて周りに伝えることが、自分自身の中ではそれと一つになるほど体験をしているのに、決まってそのごく一部しか含んでいないことに全然気づかないのである」(Jung, 1921, 邦訳p435)。こうした点を考慮すると、両タイプが実際に他者の気持ちを感じ取りにくいというよりも、むしろ自らの鋭い感受性に方向づけられているため、他者の経験と自分の感じ方が混じり合ってしまい、なかなか他者理解に際して確信が持ちにくいことがあるのかもしれない。

本研究では類型論的アプローチからの検討を行ったが、特性論的アプローチからの検討によると、外向態度および感情機能は共有経験、内向態度および思考機能は共有不全経験と関連していた (佐藤, 2009)<sup>10</sup>。感情機能についていえば、共有経験に正の影響を及ぼすが、共有不全経験に負の影響を及ぼしていた。つまり、感情機能によって相手の気持ちを共有しやすくなるが、逆に共有不全は抱きにくくなるのである。こうした点は、類型論的アプローチによる結果とも共通しており、感情機能の働きだけでは成熟した共感にまで至らないことが示唆されている。また、そうしたことを加味すると、本研究で感情タイプと思考タイプとの間に顕著な有意差が見られなかったのは、該当者の多寡が影響していた可能性もある。

## 引用文献

- Eisenberg, N., Strayer, J. (1987): Critical issues in the study of empathy. Eisenberg N, Strayer J. (Eds) *Empathy and its Development*, Cambridge University Press.
- Erickson, D. B. (1993): The relationship between personality type and preferred counseling model. *Journal of Psychological Type*, 27, 39-41.
- Feshbach, N. D. (1978): Studies on empathic behavior in children. *Progress in Experimental Personality Research*, 18, 1-47.
- von Franz, M. L. (1971): The Inferior Function. von Franz, M. L. & Hillman, J. *Lectures on Jung's typology*. New York: Spring Publications, pp3-90. 角野善宏 (監訳) (2004): ユングのタイプ論 創元社 pp3-90.
- Freud, S. (1921): *Messenpsychologie und Ich-Analyse* GW.13. 井村恒郎・小此木啓吾 (訳) (1970): 集団心理学と自我の分析 フロイト著作集6 人文書院 pp195-253.
- Hillman, J. (1971): The Feeling Function. von Franz, M. L. & Hillman, J. *Lectures on Jung's typology*. New York: Spring Publications, pp91-179. 角野善宏 (監訳) (2004): ユングのタイプ論 創元社 pp127-259
- Hoffman, M. L. (1979): Development of moral thought, feeling, and behavior. 依田明・宮前理 (訳) (1981): 道徳性の発達—道徳的思考・感情・行動の発達 依田明 (監訳) 現代児童心理学4 情緒と対人関係 金子書房 pp 89-117.
- Jenkins, S. J., Stephens, J. C., Chew, A. L., Downs, E. (1992): Examination of the relationship between the Myers-Briggs Type Indicator and empathic response. *Perceptual Motor Skills*, 74, 1003-1009.
- Jung, C. G. (1921): *Psychologische Typen*. Zurich: Rascher Verlag. 林道義 (訳) (1987) タイプ論 みすず書房
- 角田 豊 (1994): 共感経験尺度改訂版 (EESR) の作成と共感性の類型化の試み. *教育心理学研究*, 42(2), 76-83.

角田 豊 (1998) : 共感体験とカウンセリング 福村書店

Kohut, H. (1959): Introspection, empathy, and psychoanalysis: An examination of the relationships between mode of observation and theory. 伊藤洸 (訳) (1987) 内省：共感：精神分析－観察様式と理論の相互関係の検討。伊藤洸監訳：コフト入門。岩崎学術出版社。25-50

Lipps, T. (1909): Leitfaden der Psychologie. 大脇義一 (訳) (1932) 心理学原論 岩波書店

McBrides, M. M. & Martin, G. E. (1988): The relationship between psychological type and preferred counseling theory in graduate students. *Journal of Psychological Type*, 15, 46-48.

Mead, G. H. (1934): *Mind, Self and Society*. University of Chicago Press. 稲葉三千男他 (訳) (1973) 精神・自我・社会 青木書店

Meier, C. A. (1972): *Lehrbuch Der Komplexen Psychologie C.G.Jungs -Persönlichkeit* (Band IV). 氏原寛 (訳) (1993) : 個性化の過程－ユング心理学概説(4) 創元社

Piaget, J. (1964): *Six etudes de psychologie*. Gronthier. 滝沢武久 (訳) (1968) 思考の心理学 みすず書房

Rogers, C. (1957) The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, 21, 95-103. 伊東博・村山正治 (訳) (2001) ロジャーズ選集 (上) セラピーによるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件。誠信書房。265-285.

佐藤淳一 (2005) : Jungの心理学的タイプ測定尺度 (JPTS) の作成, 心理学研究, 76, 203-210.

佐藤淳一 (2009) : 共感性と感情機能について-Jungのタイプ論による検討 日本心理学会第73回大会発表論文集, p.69.

Seides, M. S. (1989) : The relationship between personality type and cognitive and emotional empathy. *Dissertation Abstracts International*, 50 (4) , 1656B.

## 注

- 1 その後、英語圏に入り「empathy」という言葉が作られた。さらにそれが日本に入り、当初「感情移入」と訳されたが、次第に「共感」と表現されるようになった。
- 2 これに対して、主体が他者の立場に立ち、他者の視点獲得や役割取得を重視する「認知的アプローチ」(Mead, 1934 ; Piaget, 1964) がある。
- 3 以下の論考は、角田 (1994, 1998) の考えに依るところが大きい。
- 4 臨床場面で出会うクライアントのなかには、それまで共感される体験が少なかったために、セラピストに同情されるのではないかという恐怖や抵抗が見え隠れすることがある。しかしながらセラピストの共感、あくまでも中立的で対等な関係の上でなされる。それだけに、共感するセラピストにとっても自己の安定を脅かされることもあるのだが、共感された側にとっては他者に理解された体験となり、低下した自尊心の回復や脆弱な自己感の安定をもたらすのである。
- 5 ここでJungのタイプ論を取り上げたのは、類型論を背景にしたパーソナリティ理論であり、ある特性が自我意識にどう位置づけられるかという点に理論的基盤を備えているからである。
- 6 たとえば、大学生男女を対象とした調査では、外向態度、感情機能、直観機能と「共感的関心」との間、内向態度、感情機能、感覚機能と「個人的苦痛」との間、感情機能、直観機能と「空想」、感情機能と「役割取得」との間に正の相関がみられていること、ISFJ, INFP, INFJタイプにおいて情緒的共感が、ENTJ, INFP, INFJ, INTJタイプにおいて認知的共感が高く示されることが報告されている (Seides, 1989)。臨床心理学専攻の大学院生を対象とした調査では、感情機能とクライアントの映像素材に対する共感反応との間に正の相関がみられている (Jenkins, Stephens, Chew & Downs, 1992)。思考タイプの院生は認知的アプローチを選択するが、感情タイプの院生は認知的アプローチと情動のアプローチの両方を選択する傾向がある (McBride & Martin, 1988)。セラピストを対象とした調査では、思考タイプのセラピストは認知的アプローチ、感情タイプのセラピストは情動的・経験的アプローチを選択する傾向がある (Erickson, 1993)。
- 7 Jung (1921) は、それまで欧米文化において地位の低かった感情を、思考、感覚、直観とならぶ心的機能の一つとして位置付けた。感情の近接概念として、情動emotion、激情affectがある。Jungは感情を情動や激情とは区別しており、情動や激情は、「一方で目に見えるほどの神経性身体症状を伴い、他方でイメージの流れに独特な乱れを生じさせるという特徴をもった感情状態」(Jung, 1921) とした。つまり先の感情は意識の機能であったのに対し、情動や激情は無意識的な感情状態といえる。Jung以降、元型学派のHillman (1971) は、感情についての包括的な議論を行う中で、激情、情動、感情の違いを検討した。激情は、もっとも原初的な解放のメカニズムを持ち、生理的な表出であり、心的水準を引き下げる働きがある。情動は、激情を基盤に持ちながら感情の特性もあわせ持ち、意識にさまざまな体験をもたらす心的状態である。感情は、主に意識と情動の関係した活動である。したがって、激情、情動、感情の順で無意識的から意識的な活動になるといえる。共感を包括的に捉えるならば、当然、無意識的な情動や激情も関わってくるが、本研究では研究の性格上、感情という意識の機能に限定して検討する。
- 8 従来の「情緒的アプローチ」と「認知的アプローチ」を統合したもので、他者の視点や役割を取得するといった認知に情緒反応が伴って共感が成立すると考える立場のことである (Feshbach, 1978; Hoffman, 1979/1981; Eisenberg & Strayer, 1987)。
- 9 たとえば一般態度については、「外向－内向」の合計得点が理論的中央値 (27点) よりも高ければ外向タイプ、低ければ

内向タイプ、同点であれば判別不可とした。心的機能についても、「思考－感情」の合計得点から思考タイプと感情タイプ、「感覚－直観」の合計得点から感覚タイプと直観タイプを判別した。そして、「思考－感情」と「感覚－直観」の理論的中央値からの絶対値を基準にして心的機能（優越機能）を判別した。最終的に一般態度と優越機能の組み合わせにより、8タイプを求めた。

- 10 JPTSの「外向－内向」,「思考－感情」,「感覚－直観」,性別を説明変数,EESRの「共有経験」,「共有不全経験」を目的変数とする強制投入法による重回帰分析を行った。その結果,共有経験については,「外向－内向」,「女性」から正の標準偏回帰係数,「思考－感情」から負の標準偏回帰係数が有意であり( $R^2=.15$ ,  $p<.001$ ),共有不全経験については,「思考－感情」から正の標準偏回帰係数,「外向－内向」から負の標準偏回帰係数が有意であった( $R^2=.12$ ,  $p<.001$ )。



# Empathy and Feeling

—An examination from the point of Jung's typology—

Junichi SATO\*

## ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate the relationships between the empathy and feeling function from the viewpoint of Jung's typology. In study, 350 undergraduate and graduate students completed the Empathic Experience Scale revised (EESR) and the Jung's Psychological Types Scale (JPTS). The result showed that extraverted feeling type had higher scores on scale of sharing experience and lower scores on scale of insufficient sharing experience, in contrast to that introverted feeling type didn't have so lower scores on insufficient sharing experience. It was discussed that hypothesis that feeling type had higher score on empathy was not fully supported. It was suggested that the empathy in extraverted feeling was tended to status of sympathy.

---

\* Clinical Psychology, Health Care and Special Support Education